ニッタ独自のグローバル展開

世界を“ニッタらしい”ものづくりで結び、ともに着実に成長していく。

ニッタの海外事業は今、これまで培ってきた力を基盤に、新たな体制で成長しようとしています。
規模だけでは測れない強みを持つニッタの海外事業や海外拠点をご紹介します。

19世紀の終わり頃（明治30年頃）、ニッタは製品の海外輸出を始め、20世紀初頭（大正時代）には、本格的なグローバルな活動を始めました。常に世界に目を向け、世界の中で事業を展開してきたのが、私たちニッタです。

1980（昭和55）年にはアメリカに初の現地法人を設立。さらに1989（平成元）年には現地で工業用ベルトの製造を開始しました。現在では、世界に31の海外法人を擁し、製造拠点も16。ニッタのものづくりは世界各国へ広がっています。

それはやみくもに拠点数や売上規模を追いかけてきた結果ではありません。海外拠点においても、ニッタらしさを大切にし、顧客の要望に丁寧に応えながら、着実に成長を続けてきました。今、世界各地で、社会や顧客、取引先との間に信頼関係を築いています。そして、そうした価値観を共有する社員たちが、各地のニッタのマークのもとで、ものづくりに取り組んでいます。



NITTA INDUSTRIES EUROPE GmbH（ドイツ）

欧州のクラフトマンシップに応えて35年

1991年設立。ドイツ経済の中心地デュッセルドルフにオフィスを、フランクフルト近郊に加工・在庫センターを持ちます。ベルト製品を軸に、ホース・チューブ製品なども扱い、繊維、製紙、印刷、物流、郵便、紙幣の選別など幅広い産業分野に対応。ヨーロッパ各国で約35年をかけて信頼を積み上げてきました。

NITTA CORPORATION (THAILAND) LIMITED（タイ）

ASEAN向けホース･チューブの中核

2015年設立。タイ東部ラヨーン県の工場で、樹脂ホース・チューブや継手製品を製造・販売し、ASEAN地域へ供給しています。2024年には第2工場が稼働し、面積は倍増。次世代自動車向け製品、燃料用・尿素SCRシステム用樹脂チューブ、ホースアッセンブリの生産体制を拡充。自動車と一般産業の双方で顧客対応力を高めています。





霓达机电科技（常州）有限公司（中国）

中国で産業用ロボットの自動化を担う

2012年設立。ニッタが中国に置く現地法人のひとつで、産業用ロボットの手先を自動で付け替える「NITTAOMEGA」など、メカトロ製品の供給を担っています。ノンケーブル給電ユニットや非接触信号通信装置といった製品で、ロボットの用途拡大と生産現場の自動化に貢献。開発から量産、技術サポートまで現地で応えています。

韓国ニッタムアー株式会社（韓国）

2024年の新工場で次世代産業に対応

1989年に合弁で設立し、2019年に完全子会社化。韓国東部の慶尚北道で、樹脂ホース・チューブや継手製品を製造・販売し、韓国の自動車、半導体、産業機械分野へ供給しています。2024年には従来の2倍以上の建屋面積を持つ新工場へ拡張移転。半導体、次世代自動車、二次電池など次世代成長産業へ向けた製品供給力を強化しています。





NITTA MOORE MEXICO S. de R.L. de C.V.（メキシコ）

北米･中南米の自動車産業を支える

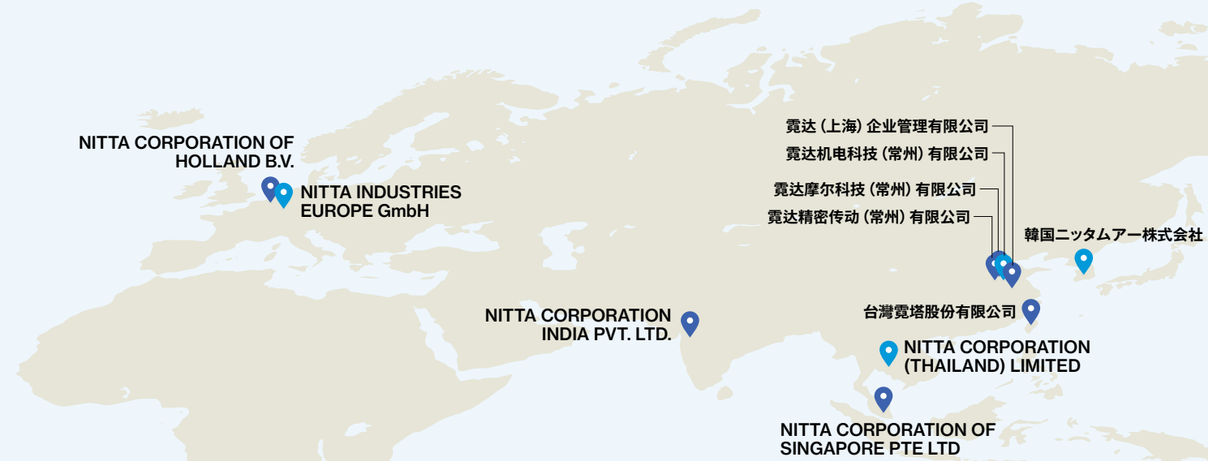
2006年設立。自動車産業集積地であるサンルイスポトシ州に工場を置き、自動車の燃料系統に用いる樹脂チューブや配管アッセンブリを製造しています。需要拡大に応じて増設を重ね、工場面積は設立当初の3倍以上に。自動車メーカーや部品メーカーへ直接、製品を納入し、北米・中南米の自動車サプライチェーンを支えています。

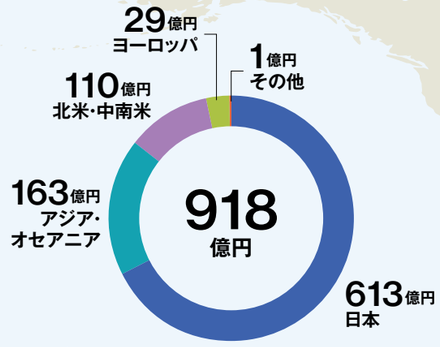
NITTA CORPORATION OF AMERICA, INC.（アメリカ）

グローバル化の起点となった地域中核拠点

1980年に設立した法人を起点として、45年以上の実績を持つ拠点。ジョージア州アトランタ近郊スワニー市にオフィスと工場を構えています。伝動・搬送用ベルトと樹脂ホース・チューブを手がけ、北米・中南米の市場をカバー。今後は、物流市場向けベルトのシェア拡大に加え、半導体分野への展開を強化していきます。







【地域ごとの売上高】
（2026年3月期）

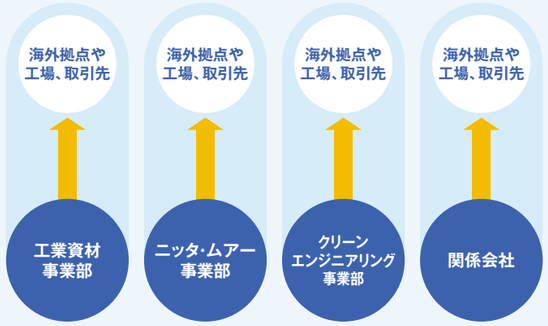
※各地域の数値は億円未満を切り捨てて表記しています。

グローバル推進室は、何を推進させるのか。

築いてきた海外拠点を、次の成長を生むネットワークへ。

『SHIFT2030』において、ニッタグループは「更なるグローバル化へのSHIFT」を掲げ、海外売上成長率180%※を目標としています。2024年4月、その実現を担う組織として、グローバル推進室を発足させました。そのことによる変化は、単に海外関連の部署が一つ増えただけにとどまりません。ニッタグループの新たなグローバル戦略が動き出しています。 ※FY2020比

［これまでの海外展開］



- 事業部ごとに市場を開拓
- 販売網・市場情報・製造ノウハウを事業ごとに蓄積
- 日本の事業部と海外拠点が、「縦」に連携

［新しいグローバル戦略］



- 事業・地域を越えて情報と機能を共有
- 拠点・工場の役割を明確化し、販売・加工・生産・投資・人材を一体で設計

事業ごとの海外展開から、グループ全体で進めるグローバル戦略へ。

これまでのニッタの海外展開では、各事業部がそれぞれに市場を開拓し、拠点や工場ごとに販売・生産・投資を判断してきました。事業ごとに販売網とノウハウが積み上がり、現地法人と日本の担当事業部が縦の線で結ばれる。その積み重ねが今日の海外事業の基盤となっています。

グローバル推進室が目指すのは、それらを横につなぎ、拠点・工場単位の最適化から、グローバルネットワーク全体の最適化へ進むことです。地域ごとの役割を明確にし、販売、加工、生産、投資、人材を一体で設計する。各事業や海外法人の関わる全体像と共通の道筋を描き、互いの力を生かして動ける仕組みをつくる。そうした使命のために、グローバル推進室は、事業部ではなくコーポレートセンターに置かれ、活動を進めています。

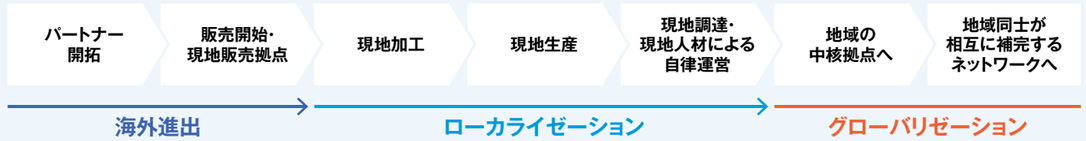
グローバル推進室の3つの役割

- 全体像を描く
- 事業部を超えてつなぐ
- 仕組みをつくる

ローカライゼーションから、真のグローバリゼーションへ。

ニッタグループでは「海外売上が伸び海外工場が増えれば、グローバル化が進んでいる」とは考えません。海外での事業は、パートナーの開拓に始まり、現地での販売、加工、生産、そして原材料の現地調達へと、段階を追って進んでいきます。並行して、工場の運営を任せられる人材、財務や人事、法務といった機能を担う人材を、現地で育成する必要があります。現地に人と仕組みが根づき、その地域の力で事業が動くようになる。こうしたローカライゼーションを経て、はじめて拠点と拠点が支え合う本当のグローバリゼーションが見えてきます。私たちのグローバリゼーションは一歩ずつ着実に進んでいきます。

［ニッタの考えるグローバリゼーション］



［地域ごとの強みを磨き、相互に補完するネットワークへ］

日本	北米・中国	ASEAN・インド
マザー機能	利益中核	段階進化
技術開発の源泉 品質の基準 人材育成の母体＋ コーポレート機能	最大市場 量産利益 設備の 高度化・効率化	販売→加工 →生産へ

拠点単位の最適化から、グローバルネットワーク全体の最適化へ。

真のグローバリゼーションに向けては、すべての地域が同じ姿を目指すべきではありません。ニッタグループが描いているのは、地域ごとに役割を定めるリージョナル最適化です。本社機能の日本、最大市場の北米・中国、成長市場のグローバルサウス、3つそれぞれが地域内で価値を生み出し、互いの強みで補い合う。そうしてつながったネットワークこそが、変化の激しい時代にニッタグループを支え、成長する力になるはずです。

「世界でwin-winの関係を築き、市場を拓くとともに、グローバル人材を育てたい」



執行役員
グローバル推進担当
和氣厚仁

グローバル推進室には多くの役割がありますが、その一つは、まだ海外に出したことのない製品をどうやって取引のない国へ持って行くかを考え、実行することです。

例えば、ある医療業界向け製品では、ニッタ製品の品質・信頼性と、別事業でのインドの協業先が持つ顧客ネットワークとを組み合わせ、win-winの関係を築いて北米市場へ展開する道筋を描いています。事業部単位では生まれにくい発想で、従来の枠を越えた活動をしていきます。

グローバル推進室のメンバーは今、こうした「ゼロから市場を拓く経験」を積んでいます。それは、グローバル推進室のもう一つの役割である、将来のグローバル戦略を担う人材の育成にもつながると考えています。



TOPIC／

インド新工場の竣工は、完成ではなく、始まり。

インドから、ニッタの新しいグローバルモデルを。

2026年2月に竣工したインド新工場は、ニッタの新しいグローバル戦略を形にする重要な拠点です。ベルト事業では加工機能を強化し、成長するインド市場への安定供給、その先には未開拓のグローバルサウスへの販売網構築を見据えます。ホース・チューブ事業では、拡大する現地需要に応える生産機能を整備。クリーンエンジニアリング事業では、半導体・製薬分野などを視野に供給体制を築いていきます。

3つの事業が1つの拠点に集まることで、情報や販売チャネル、製造・物流機能を共有し、単独の事業では届きにくかった市場への展開が可能になります。インド新工場は、事業の枠を越えてグループの力を生かす、新たな製造販売拠点です。

インドでは、これから、原材料の現地調達、現地人材による工場運営、品質・改善活動、財務や人事などのコーポレート機能まで、現地で自律的に事業を動かせる体制を築いていきます。

既に長い歴史と実績を持つ拠点を後から変えるのではなく、新しく立ち上がるインドで、今後目指すべき新しいローカライゼーションの姿を初めから設計する。その成功を、成長が見込まれるグローバルサウスなどへ広げ、各地域が自立しながら相互に補完しあうネットワークへ発展させていく考えです。つまりインドの拠点であるNITTA CORPORATION INDIA PVT. LTD.は、ニッタのグローバルモデルの新たな出発点となります。




新工場は、ムンバイとともに経済回廊を形成する大都市プネーに立地。竣工式は現地文化を取り入れて行われました。